令和2年度

学 校 自 己 評 価 表

上田市立第三中学校

学校教育目標	中・長期的目標	総合評価
○自主性を養う。 ・自らより高い価値を創造しようとする力をつける。 （願う生徒の姿） 自ら考え、自ら判断し、自ら行動できる生徒	挨拶の行き交う学校に　歌声の響く学校に 清掃に打ち込む学校に　時を守る学校に 学習に集中する学校に　読書に親しむ学校に	ウィズ・コロナの今や今後の学びにとって特にICTの活用は待ったなしの課題である。わかりやすい授業だという一定の評価は出たものの、この点に関しては授業改善の一つの方向性として追究していく必要がありそうである。学力向上の視点に立てば、各種調査によって課題点が見えてきたり、新JIGAKU地域ボランティアの方々による生徒の実態を教えていただいたりしたことを授業にフィードバックしていくことがこれからは求められる。授業改善につながる取組をしていきたい。また不登校生の数はチーム対応が功を奏して減少傾向にあるものの、個に応じたきめ細かい支援を考えると関係機関との連携は必須であり、さらなる個に応じた対応を追究していきたい。

令和2年度　学校重点目標	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
①授業のユニバーサルデザイン化を進め、誰もが楽しく学べる授業になるよう授業改善に取り組む。	①職員会議の中に信州型UD研修を位置づけ、具体の生徒の姿から手立てをグループワークでディスカッションするといったことを随時行ってきたこともあり、職員の授業改善に向けての意識は変わり、わかりやすい授業になってきている。ICTの活用に慣れない職員の研修が急務である。		○			①信州型UD研修、ICT研修を定期的に実施していく。
②学校が安心・安全な環境になるよう相手の立場になって考える学級・学年づくりに取り組む。	②いじめや差別を許さない雰囲気がどの学年も醸成されてきており、職員も相談に乗ろうと努めてきている。昨年度よりも安心・安全な学校という意識が高まった。		○			②報告・連絡・相談を確実に行い、方策を見定めた上で生徒指導にあたるチーム対応で、安心・安全な学校づくりをさらに推し進めていく。
③地域の人々に学び、探究的な学習を取り組み、キャリア教育につながる学習を推進する。	③コロナ禍ということもあり、職場体験や地域奉仕の活動などの中止はあったものの、生き方を考える座談会や進路講話など地域の方の力をお借りし、キャリア教育を推進できた。形骸化することなく探究的な学びを創造していきたい。		○			③「地域を学び」「地域に学び」「地域のために学ぶ」中でキャリア教育を推進し、形骸化することなく学習内容・学習形態を更新していく。

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
学校教育	学習指導	学習課題の明確化	本時の学習課題が明確で、生徒が意欲的に学べるものになっているか。 【設定方法、提示方法、提示後の生徒の取組】	「課題の明確化」を意識し授業改善をしてきた職員が昨年度よりも多くなってきている。	○				研修として校外に出なくとも校内で授業力を向上させる仕組を模索し、共に学ぶ同僚性のある学校づくりをしていきたい。
		言語活動の充実	授業の中で話し合う場面（情報交換）を取り入れた授業を行っているか。	コロナ禍もあり、話し合う場面を多く取り入れることは難しかったが、ホワイトボードを活用したり、短時間のグループワークを採用したり工夫してきた。			○		「自ら問いを立て答えを見いだす授業」の視点からICTの活用を若手もベテランもなく扱えるようこれからの学びを見据えて研修の機会をつくっていきたい。
		個に応じた学習支援	授業での視覚化、具体化、肯定化等UD化を推進し、教師が各自の課題をもって授業改善に取り組むことができたか。	パソコンを活用した授業、グループワークの採用、多層問題プリントなど個に応じた工夫を取り入れた授業が多くなってきている。		○			
		分かる授業、できる授業づくり	個に応じた学習指導や補充・発展の支援により、分かる・できる授業づくりができたか。【数学科TT指導・英語科小集団学習】	3年数学科TT指導に対する評価は一回目評価の時より10ポイント以上上昇した9割弱の生徒が高評価としており、TT指導が功を奏してきた。		○			TT指導、小集団学習が行えるよう職員組織を考えたい。
		家庭学習の定着	「授業と家庭学習のつながり」に視点をおいた課題により、自分自身で家庭学習の質を高めていけるよう継続的に指導できたか。	毎日家庭学習に取り組んでいる生徒は76%となっているが、与えられた課題に対する学習から自主的な家庭学習につながるような指導が課題である。			○		自主的な家庭学習になっていくよう各教科会で検討し、年度初めのガイダンスで示していくようにしたい。
	生活・生徒指導	基本的生活習慣の確立	生徒の基本的な生活習慣や健康を培う指導ができたか。 【元気アップの取組、遅刻への対応、家庭との連携状況】	給食時の栄養指導、生活委員による毎日の遅刻調査といった取組をしてきている。各家庭との連携なくしては基本的生活習慣はつくりづらいので、この点に力を注ぎたい。		○			基本的な生活習慣の重要性を発信する養護教諭、登校を見守る担任・副担任、学年を超えた生徒指導などチーム対応で生徒を導き、家庭にも協力を求めていきたい。
		認め合い、支え合える集団づくり	互いに認め合い、支え合える人間関係を育てる指導に取り組めたか。	本校生徒は「思いやりのある行動ができている」と評価されている保護者は昨年度より11ポイント上げて85．6%となった。いじめや差別を許さない雰囲気を人権同和教育など折に触れて取り組んできたこともある。	○				人権同和教育、道徳教育を中心に他者の視点に立つ視座を変えた見方のできる生徒を育成していきたい。
		不登校傾向生への支援・相談室の支援	一人一人の生徒の実態を把握し、チーム支援を進めることができたか。 【支援体制の明確化、支援会議の定例化】	「誰が、いつ、何を」といったことを明確に不登校対策委員会を中心に取り組んできた成果もあり、昨年度よりは不登校傾向の生徒は減少してきている。さらに関係機関との連携で減らしていきたい。		○			不登校生の抱える課題点を学校外の関係機関と連携して支援の方向を探るスクリーニングを月一回実施していきたい。
		安全で安心できる学校	生徒が安全で安心して生活できる学校づくりに取り組めているか。 【生徒の声を吸い上げる体制の充実】	生徒の相談にのりチームで取り組もうと努めた職員、いじめや差別をゆるさない雰囲気を醸成してきた生徒により、安心・安全な学校と捉える生徒、保護者が昨年度よりも9%弱増えた。		○			生徒の実態を把握したら報告・連絡・相談を即実施し、方策を検討し、チームで対応する中で、どの生徒にも安心・安全な学校と思えるようにしていきたい。
		相談活動の充実	生徒にとって相談しやすい環境を整えられたか。【年3回の教育相談、なんでも相談室】	毎学期、一人10分ずつの相談の時間の中で生徒と教師との相対の時間を確保したり、校長室や保健室を「なんでも相談室」にしたりして相談にのる環境に努めてきた。		○			毎学期、一人必ず10分程度の相対の時間を設定し、相談のみならず生徒と教師が「語り合う時間」の中で大人に成長していく場にしていきたい。
		生徒会活動・学年活動の充実	生徒が前面に出た活動につながるような支援ができたか。	音楽会の在り方を生徒と職員が協働で協議し、新たな方式を創り出すなど生徒が前面に出て学校づくりに参画できるよう努めてきた。		○			学校教育目標「自主性を養う」重要な場の一つとして生徒会活動を捉え、合意形成の過程を大切にした学校づくりをしていきたい。
		気持ちのよい挨拶	教師が率先して挨拶し、生徒が気持ちのよい挨拶を交わしあうことができるよう取り組むことができたか。	教師が率先して挨拶をするよう全職員が意識して実践してきた。生徒会でも「挨拶の行き交う学校に」なるよう自主的に活動する動きが生まれてきている。		○			生徒の中から出てきた「挨拶の行き交う学校に」の取組を大切に扱い、広げていきたい。
		清掃・環境整美への取り組み	身支度を整え、無言清掃に取り組み、校舎内・教室内の環境を整えることができる指導ができたか。	教師が近くにいなくても熱心に清掃に取り組む生徒、清掃がない日が続いたら自主的にきれいにしようとする生徒など生徒の自主的清掃活動になるよう支援してきた。94%の生徒が清掃に精一杯取り組んでいると自己評価している。		○			時間が設定されているから清掃をするだけでなく、生活に支障があるから清掃をしたいという生徒になるよう指導・支援していきたい。
学校運営	保護者・地域との連携	学校開放日・体験入学等の実施	年3回の学校開放日や体験授業（新入生）等を通して、本校への理解や関心を高めてもらうことができたか。	コロナ禍もあり、授業参観が行えない一年となったが、テレビ放送による文化祭参観や密を避けるため日を分けて実施した学年PTAによって学校理解に努めてきた。			○		仮に授業参観に制限がかかってしまっても学校理解の場になるようICTを駆使するなど在り方を模索し続けていきたい。
		情報の発信	学校だよりや学年学級だより、学校メール等を通して情報提供し本校の取り組みに関心を高めてもらうことができたか。	コロナ禍ということもあり、学校だよりや学年だよりを定期的に発信したり、ホームページや学校メールで随時情報発信に努めたりしてきた。回数も重要だが、わかりやすい情報発信になるよう心掛けていきたい。		○			発信する内容を精査し、混乱や不安につながることのないよう発信物には細心の注意を払っていきたい。
		地域との連携推進	地域と連携し、学習活動を工夫することができたか。【「三中応援団」の活用】	直接生徒と接する連携は難しい環境下ではあったが、地域ボランティアの方による新JIGAKUの問題の採点・添削や職場体験に代わる生き方を考える座談会など三中応援団は生徒の成長に大いに尽力していただいた。		○			地域ボランティアの方々の取組を授業や特別活動等によりフィードバックし、さらなる学力向上や生きる力につながるよう学社連携を強めていきたい。